

馬産地十和田における 昭和30～50年代の変化

家畜飼養の変化に着目して

Transformation of Towada as a Horse-breeding Region from the Late 1950s
to the Early 1980s : Focused on the Changes of Livestock Breeding

上形智香

KAMIGATA Chika

はじめに

①地域概況

②十和田市全体の家畜飼養の変化

③集落の変化

④馬産地十和田における昭和30年代～50年代の変化

おわりに

[論文要旨]

農耕・運搬・厩肥生産などに用いられるため、多くの家で飼養されていた家畜は、農業用機械や自動車の普及などにより飼養が激減した。家畜飼養の激減を受け、家畜の生産地帯ではどのような変化が起こったのか。本稿は青森県十和田市を事例とし、家畜生産地帯であった農村における家畜飼養の変化を明らかにするものである。十和田市は古くからの馬産地であり、現在も畜産が盛んに行われている地域である。冷涼な気候のため農業による十分な収入が見込めなかった当地において、家畜、特に馬を売ることによって得る収入は大きかった。そのため、馬産は重要な生業であり、馬は不可欠な存在であった。しかし、現在の十和田市では馬産を行う家は少なく、盛んに飼養されている家畜は肉用牛と豚である。かつての馬産地から現在の肉用牛・豚の生産地への転換は、どのように行われたのか。また、家畜飼養者は飼養する家畜をどのように選択してきたのか。十和田市における家畜飼養が大きく変化したと考えられる昭和30～50年代の様子を明らかにすることで、これらの間に答えていく。②では統計資料や十和田市の広報誌などを用いて、十和田市の家畜飼養の変遷の全体像を把握する。馬産地であった十和田市が現在の肉用牛・豚の飼養が盛んになった時期を明らかにすると同時に、飼養する家畜が変化した要因を明らかにする。③では性格の異なる2集落を取り上げ、集落における家畜飼養の変遷を記述する。かつては集落のほとんどの家で飼養されていた家畜が、特定の場所で特定の人により飼養されるようになっていく過程を明らかにする。④では飼養する家畜を選択する際に、家畜を飼養する「手間」と家畜から得られる「儲け」が重視されてきたことを指摘する。兼業化や耕作地の増加など、家畜以外による収入が増加することで、「手間」がかからず「儲け」の大きい家畜が選択されるようになっていった。

【キーワード】 馬産地、畜産、公害、家畜市場、「手間」と「儲け」

はじめに

かつて牛馬を始めとした家畜⁽¹⁾は、農耕・運搬・堆肥生産などに用いられるため、多くの家で飼養されていた。しかし、昭和30年代以降の農業用機械や自動車の普及などにより家畜の役割は失われ、家畜を飼養する家は減少した。

これまでの民俗学において、家畜の飼養形態や流通など、家畜飼養に関わる研究は多く蓄積されてきた。農村で多く飼養されていた牛馬は農耕に用いられていただけでなく、繁殖を行い子牛や子馬を売ったり、貸借や馬小作を行ったりすることで収入源としていたことが明らかになっている[安室 2012; 野本 2015 など]。特に、気候や土地の条件により農業が難しく、現金収入が少なかった地域において、牛馬を売ることによる収入は重要であった。では、農業用機械の普及などを経て農村から家畜が姿を消していくなかで、家畜を売ることが重要な収入源としていた家畜の生産地帯ではどのような変化が起こったのか。農村から家畜が減少していく過程に着目した論考は少ない⁽²⁾。そこで本稿では家畜の生産地帯であった地域に着目し、高度経済成長期を経て家畜飼養がどのように変化したのかを明らかにする。家畜の主な飼養目的が使役から食用へと変化するなかで、家畜を飼養することに対する考え方はどのように変化してきたのか。調査対象地として十和田市を取り上げ、高度経済成長期における家畜飼養の変化を記述する。

十和田市を含む青森県東部は、少なくとも平安時代には馬産地として知られていた地域である⁽³⁾。しかし、平成26(2014)年2月1日現在、市内で飼養される馬は160頭であり、牛11,873頭(乳用牛398頭・肉用牛11,475頭)、豚77,548頭に比べると圧倒的に少なく、家畜飼養の中心は肉用牛や豚となっている[十和田市農林部農林畜産課 2015]。馬産地から肉用牛・豚へと飼養する家畜が転換するなかで、どのような変化があったのか。家畜飼養に対する考え方、そして飼養する家畜が転換した理由を検討していく。本稿では、十和田市域において古くから飼養されてきた牛馬と、現在飼養が盛んな豚に着目し、飼養する家畜の主体が馬から牛・豚へと転換していく様子を取り上げることで、家畜の生産地帯における生活変化の一端を示す。特に焦点を当てる時期は、昭和30年代～昭和50年代である。この時期は市内の家畜飼養の変化が大きかった時期であると同時に、現在の十和田市の畜産の情勢の下地が作られた時期と考えられるためである。十和田市では多くの家畜が飼養されてきたが、本稿では特に飼養が盛んであった馬・牛・豚に着目する。

以下、①で地域概況を説明した後、②では統計データを用いて家畜飼養の変遷を明らかにし、家畜飼養の変化の背景にある政策や家畜市場の状況を明らかにする。続く③では、より具体的に市内の家畜飼養の変化の様子をみるため、晴山集落と七郷集落を取り上げる。④では②・③で明らかにしてきた家畜飼養の変化をまとめ、家畜飼養のあり方の変化を明らかにするとともに、飼養する家畜の選択基準について検討する。

①……………地域概況

本稿の調査地である青森県十和田市は青森県南東部の中央に位置している(図1)。十和田市は昭

和31（1956）年、上北郡三本木町・四和村・藤坂村・大深内村の1町3村の合併により誕生した。その後、平成17（2005）年に隣接する十和田湖町と合併し、総面積72,567haを有する現在の十和田市となった。総人口は平成27（2015）年3月31日現在、63,581人、総戸数は27,104戸であり、その内農家戸数は3,189戸である。市の南西部には十和田湖があり、市の中部から東部は平坦な三本木原が広がっている。本稿で扱う年代は十和田湖町と合併前の十和田市であるため、特に注記のなく「十和田市」と記している場合は合併以前の十和田市を指しているものとする。



図1 十和田市の位置

現在の十和田市は畜産・野菜・稲作が盛んに行われている農業の盛んな市である。畜産では、乳用牛の飼養頭数は青森県内7位、肉用牛と豚の飼養頭数は青森県内で1位であり、肉用牛と豚は県内の生産量の20%以上を占める。野菜では、にんにく・ごぼうの生産量は青森県内で1位、稲作の生産量は3位に位置している [十和田市農林部農林畜産課 2014]。

現在のように十和田市で農業、特に稲作が盛んに行われるようになったのは、戦後のことである。十和田市を含む青森県東部は、冬季の積雪が少なく日照時間が長い地域であるものの、夏季はヤマセによる低温と日照不足により、稲作などは冷害の受けやすい地域でもあった。そのため、稲作は難しく、畑作と馬産が主な収入源となっていた。しかし、戦後、冷害に強い稲の品種の開発などによる寒冷地農業技術が確立されたことで稲作が可能になった [青森地域社会研究所 1986 54]。昭和35（1960）年以降、青森県の南部地域及び開拓地において農家所得の向上をはかるため、青森県が県営・団体営灌漑排水事業と圃場整備を推進したことで開田ブームが起これり、田の面積が大幅に増加した。青森県の開田ブームは全国的な開田ブームよりも10年遅れており、米の生産調整が行われる昭和45（1970）年まで続いた。米の生産調整が行われた後、野菜・葉たばこ・一般果樹（ぶどう・なし・桜桃など）・養蚕の振興や産地育成が行われたことで、稲作と畑作と畜産を組み合わせた経営が盛んに行われるようになった [青森地域社会研究所 1986 72]。

古くから馬産が発達していた十和田市やその周辺地域は、近世には盛岡藩営の牧が置かれ、南部馬の生産が行われていた。南部馬はその体格と性格から、軍馬として、そして農馬としても優れていたという [兼平 2015 11]。近代に入ると明治18（1885）年に軍馬補充部三本木支部の前身である軍馬局青森出張所が三本木村（後の三本木町、現在の十和田市）に置かれたことから、「軍馬の町」として繁栄した。第二次世界大戦終戦により軍馬需要のなくなった後も、農耕や運搬、繁殖等に用いるために、多くの家で馬の飼養が続けられた。十和田市で馬の飼養が盛んであったことは、信仰の面にもあらわれている。市内には「蒼前神」と呼ばれる神を祀る神社が数多くある（写真1）。蒼前神は馬の神・家畜の神として当地の人々に考えられている。蒼前神を祀る神社の社殿内には、飼養する家畜を描いた絵馬や品評会⁽⁵⁾で入賞した賞状、軍馬として買い取られた馬の写真などが奉納されていることが多い（写真2）。



写真1 十和田市内の蒼前神社外観
平成23年8月28日筆者撮影



写真2 神社内に貼られた絵馬
平成23年8月28日筆者撮影

現在の十和田市では馬の飼養は衰退し、主に飼養される家畜は肉用牛と豚である。このような十和田市の家畜飼養状況はいつ頃形成されたのであろうか。

②……………十和田市全体の家畜飼養の変化

十和田市における馬牛豚の飼養戸数⁽⁶⁾、飼養頭数、家畜市場出場頭数⁽⁷⁾はそれぞれ、図2・3・4のように変化している。

図2～4それぞれから読み取れる内容を以下に記す。

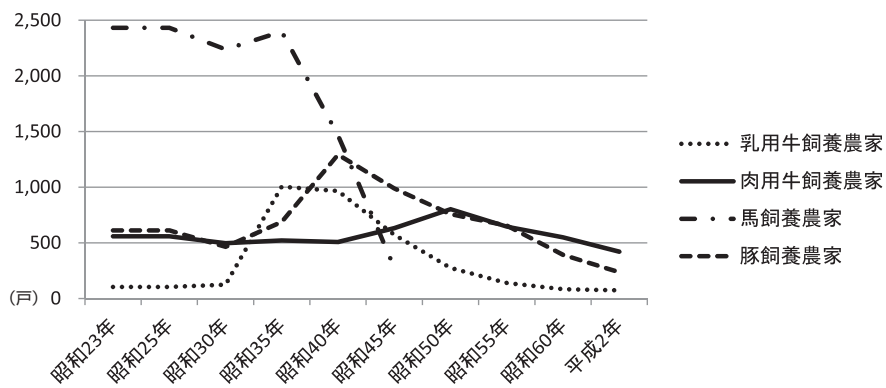


図2 十和田市の家畜飼養農家戸数

【図2】

- ①馬は昭和30年代後半から激減している。
- ②乳用牛は昭和30年代前半に大きく増加しているものの、昭和40年以降減少に転じている。
- ③肉用牛は昭和30年代まで微減傾向にあったものの、昭和40年代に増加し、昭和50年代には再び減少に転じている。
- ④豚は昭和30年代後半に大きく増えたものの、昭和40年代に減少に転じている。

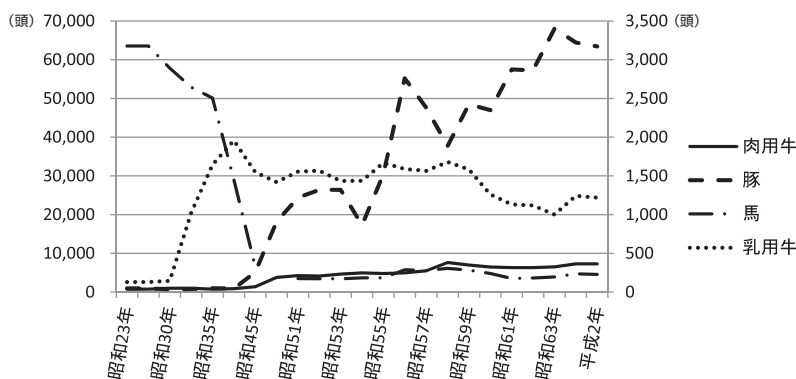


図3 十和田市の家畜頭数 *乳用牛と馬が右軸

【図3】

- ①馬は昭和30年代前半までは僅かに減少しながらも乳用牛・豚・肉用牛のなかで最も多かったものの、昭和30年代後半以降激減している。
- ②乳用牛は昭和20年代後半～昭和30年代前半にかけて大きく増加したものの、以降減少に転じ、僅かな増減を繰り返しながら減少傾向にある。
- ③肉用牛は昭和30年代まで大きな増減はみられなかったが、以降ゆるやかに増加している。
- ④豚は昭和30年代後半に増加し、以降増減を繰り返しながら増加している。

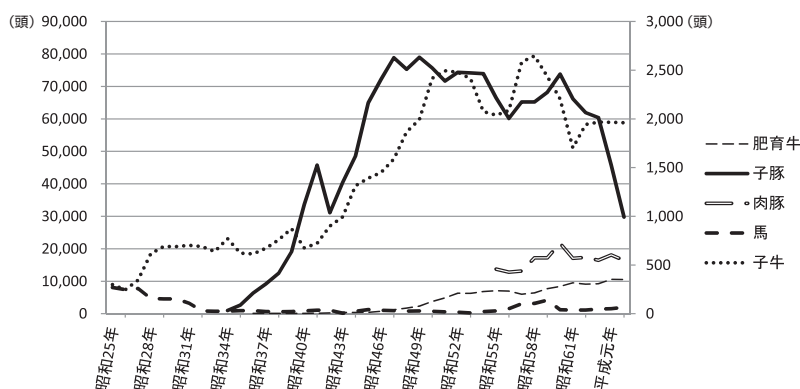


図4 家畜市場出場頭数 *馬と子牛が右軸

【図4】

- ①馬の出場頭数は昭和30年代前半に大きく減少し、僅かに増加した年もあるものの、他の家畜に比べると圧倒的に少ない頭数で推移している。
- ②子牛の出場頭数は昭和40年代前半に増加した。昭和50年代以降は増減を繰り返している。
- ③肥育牛市場は昭和37年よりはじまり、昭和40年代後半より出場頭数が大きく増加している。
- ④子豚市場は昭和34年より始まり、年々増加を続け、最も出場頭数の多い市場となっている。
- ⑤昭和55（1980）年に始まった肉豚市場は増加傾向にある。

【図2～4】

- ①昭和30年代までは家畜飼養の主体は馬であったものの、その後は肉用牛・豚が中心となっている。
- ②乳用牛の飼養戸数は昭和40年以降減少を続けているものの、飼養頭数は昭和40年代に減少した後、昭和50年代に僅かな増減を繰り返していることから、一戸当たりの飼養戸数が増加している。
- ③豚の飼養戸数は昭和40年代後半に減少に転じているものの、飼養頭数は増加を続けていることから、一戸当たりの飼養頭数が増加している。
- ④牛の飼養戸数は昭和50年代前半に減少に転じているものの、飼養頭数は増加を続けていることから、一戸当たりの飼養頭数が増加している。

以上の点から、十和田市の家畜飼養の変化は、昭和20年代までは主に馬が飼養されていたが、昭和30年代に乳用牛の飼養が盛んになったこと、そして、昭和30年代後半に馬の飼養が、昭和40年以降は乳牛の飼養が衰退し、その後は豚と肉用牛の飼養が盛んになったことが明らかになった。

上述したような家畜の飼養状況の変遷に応じて、十和田市の家畜飼養を3つの時期に区分する。すなわち、(1)馬主体期(昭和20年代後半)、(2)乳用牛増加期(昭和30年代)、(3)肉用牛・豚主体期(昭和40年代以降)である。

3つの時期それぞれの十和田市内における家畜飼養の状況を、飼養が盛んとなる家畜が転換する時期の政策や市場の動向等にも触れながら明らかにしていく。

(1) 馬主体期

馬の主な用途は、農耕と繁殖であった。生まれた子馬は2歳になると三本木町で行われていたセリに出していた。セリは毎年11月に行われ、周辺の町村から馬の売買に訪れる人々で賑わっていた(写真3)。

馬の飼養頭数は他の家畜よりも多かったものの、昭和20年代半ば以降、飼養頭数は減少しており、馬産は衰退傾向にあったようである。三本木畜産農協によると、「戦後は軍馬の必要もなくなり馬産衰退の一途をたどり加うるに馬と子牛の収入不足のため赤字決算の連続で」[三本



写真3 明治41年ごろのセリの様子

『百年のあゆみ 創立百周年および事務所等新築移転落成記念誌』[三本木畜産農協同組合 1984]より抜粋

木畜産農業協同組合 1974 28] あったという。一般馬の平均価格は昭和6年の97円を除き、150円前後である。一方、軍馬は300円前後の値段がつけられ、優秀馬になると1,000～2,000円の値段がついた[軍馬補充部三本木支部創立百周年記念実行委員会 1987 67-68]。軍馬は一般の馬よりも数倍、ときには数十倍もの値段で買い取られたため、軍馬として馬を買い取られることは名誉なことであると同時に、莫大な収入をもたらしていた。そのため、軍馬需要があった頃は、「軍馬御用」となる

ことを目指して馬産が盛んに行われていたが、終戦により馬産に力を入れる家が減少したことが推察される。

馬以外に牛や豚を飼養する家もあった。この地域で主に飼養されていた牛は「赤牛」「赤ベコ」などと呼ばれる日本短角種である。農林省畜産局の行った東北地方の短角系種に関する調査によると、日本短角種は青森・秋田・岩手県の旧盛岡藩領で飼養されていた南部牛に、明治4（1872）年以來輸入された短角種との交配によって生まれた種であるという〔農林省畜産局 1951 1〕。この地域の牛の飼養について「^{こらし}犢の生産売却と冬季舎飼の厩肥を目的とし牛の経済的能力である役乳等の利用は全然無関心に等しい」〔農林省畜産局 1951 11-12〕と述べられていることから、牛よりも馬が役畜として用いられていたことがうかがえる。「犢の生産売却」が目的と述べられているように繁殖用の牝牛を飼養する家が多かったようで、生まれた子牛は三本木畜産農協が運営する子牛市場に出されていた。成牛をバクロウから購入し、肥育を行う家もあったようである。昭和20年代末に国の主導する有畜農家創設事業によって、肉用牛の牝牛貸付事業が行われた。三本木市場の子牛市場をみると、昭和20年代末～昭和30年代前半に出場頭数が増加しており、同時期の肉用牛飼養頭数が増加していることから、政策の影響がうかがえる。

(2) 乳用牛増加期

昭和30年代前半に乳用牛の飼養頭数が大きく増加した。乳用牛の頭数・飼養戸数は馬のそれには及ばなかったものの、馬の飼養頭数が減少するなかで乳用牛の飼養頭数の大きな増加は十和田市における家畜飼養に大きな影響を与えたと考えられる。乳用牛の飼養が増加する時期から衰退するまでの様子を見ていく。

乳用牛の増加は、国や県の政策による影響が大きい。戦後、国は農家の経営を安定させるために有畜農家創生事業を行った。家畜のなかで特に振興が行われたのは最も経済性の高いとされる乳用牛であった。昭和29（1954）年、集約酪農地域指定が行われ、酪農の振興を図るための酪農振興法が制定されると、青森県は耕種農業経営が不安定であった青森県東部の15町村を集約酪農地域⁽⁸⁾として申請した〔青森県経済部畜産課 1959 1〕。申請の結果昭和30年に集約酪農地域に指定された十和田市では、世界銀行からの融資や三本木畜産農協の貸借借制度を利用するなどして乳用牛が導入された(表1)。昭和33年の時点で、十和田市内では984戸が1,622頭の乳用牛を飼養しており、飼養戸数は十和田市内の農家の34%にあたる〔青森県経済部畜産課 1959 3〕。昭和30年代前半は、飼養規模が1～2頭である家が9割を占めていた⁽⁹⁾。集約酪農地域指定後、雪印乳業・明治乳業の生産工場が十和田市におかれ、市内を含む周辺の酪農家で搾乳された乳が集荷・出荷されていた。

表1 乳用牛の導入方法 『十和田集約酪農地域建設過程』〔青森県経済部畜産課 1959〕を参考に筆者作成

入手方法	自己資金	他人からの借入	国有牛	県有牛	町村有牛	農協からの借入 (有畜農家世銀 借款を含む)	金融業 から借入	家畜商 から借入	計
十和田市 (頭)	278	14	428	58	1	193	0	5	977
全体(頭)	711	30	1,084	256	58	1,109	1	5	3,254
比率(%)	22	1	33	8	2	34			100

乳用牛導入後の生活について、青森県畜産課が昭和34（1959）年頃十和田集約酪農地域の酪農家に行ったアンケートがあるため、結果から当時の生活の様子をうかがいたい。十和田集約酪農地域における経営・生活についてのアンケート結果は、表2のようになっている。酪農家の経営について、集約酪農地域全体でうまくいっていると答えた人は4割弱、十和田市のみでみると3割弱であった。また、生活が楽か・困っているかを問うアンケートでは、大変楽になった・楽になったよりも、普通・困っている・大変困っていると回答した人の方が多い。乳用牛導入から年月の浅い時期に行ったアンケートではあるものの、この結果からは乳用牛の導入で生活が楽になった様子とはうかがえない。乳用牛導入後の生活苦を訴える要因には、乳価の値下げが影響していたと考えられる。集約酪農地域指定直後の昭和31年は牛乳の需要増加により乳価が上昇したものの、昭和32～33年には一転して生産過剰となり、乳価の値下げが複数回にわたり行われた。

表2 乳用牛導入後の生活 『十和田集約酪農地域建設過程』[青森県経済部畜産課 1959]を参考に筆者作成

	うまくいっている	うまくいってない	わからない	計
十和田市（戸）	169	227	206	602
地域計（戸）	730	583	696	2,009

乳用牛導入後の生活苦を受け、十和田市は酪農改善計画を樹立した。その結果、乳用牛の飼養頭数は増加し、昭和39（1964）年には県内3位の飼養頭数となった[十和田市 1976 318]。しかし、昭和30年代半ば以降の度重なる乳価の値下げに伴い乳用牛の飼養戸数は減少を続け、飼養を続ける家では収益を上げるために飼養規模を拡大させていくこととなった。飼養戸数が減少し、経営規模が大きくなった理由として、物価水準・生活水準の上昇のために所得規模の拡大を急いだこと、そして、乳質改善の要請が強まったことで酪農家個々にバルククーラー⁽¹⁰⁾の設備が必要になり、酪農を続けるための新たな設備が必要になったことが挙げられる[青森地域研究所 1986 473]。経営規模を大きくした酪農家は専門化していき、牧草を自作するための牧草地や畑を中心とした土地集積を行った[杉山 1984 351]。

乳用牛の頭数が増加した一方で、馬・肉用牛・豚の頭数に大きな変化はみられなかった。このことから、乳用牛の導入と並行して他の家畜が飼養されていたことがうかがえる。

(3) 肉用牛・豚主体期

昭和30年代後半に馬の飼養が、昭和40年代前半に乳用牛の飼養が減少に転じた一方で、三本木市場における肉牛・豚の出荷頭数、十和田市内における豚の飼養は昭和30年代後半から、肉用牛の飼養は昭和40年代から増加傾向にある。

食肉の一人あたりの年間消費量は昭和30年代半ば以降増加し、昭和40年代に大きく増加している(図5)。食肉需要の増加に伴い、豚肉・牛肉価格も高騰した。十和田市における肉用牛・豚の飼養も同時期に盛んになっていることから、食肉需要・市場価格が飼養状況に影響していることがうかがえる。また、昭和36（1961）年に制定された農業基本法による選択的拡大政策や三本木畜産農協の肉畜移行⁽¹¹⁾なども肉用牛・豚の飼養増加と同時期に行われていることから、肉用牛・豚の飼養の

隆盛に影響していると推察される（写真4・5）。豚と肉用牛，それぞれの飼養頭数・戸数が増加した時期，そして飼養戸数が減少に転じた背景をみていきたい。

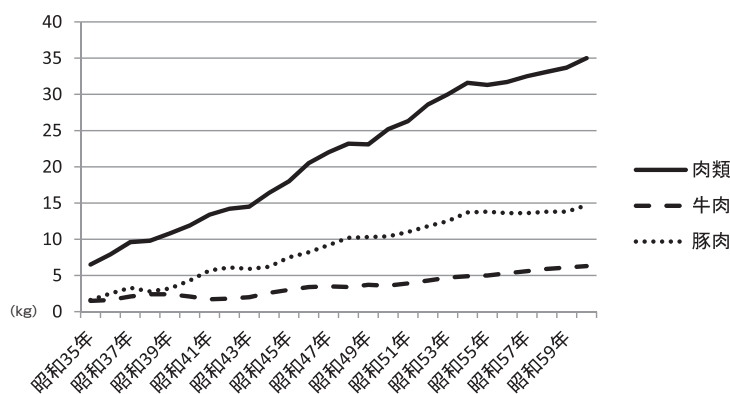


図5 食肉の一人あたりの年間消費量 『食料需給表』にもとづき筆者作成



写真4 肥育牛市場風景
『三本木畜産農業協同組合小史』
[三本木畜産農業協同組合 1974] より抜粋



写真5 子豚市場風景
『三本木畜産農業協同組合小史』
[三本木畜産農業協同組合 1974] より抜粋

豚の飼養や市場への出場頭数は肉用牛のそれよりも早期に増加がみられる。豚の飼養が肉用牛よりも早期に盛んになった理由として，豚肉は加工肉としても利用されるため，牛肉よりも豚肉の消費量が多かったことが挙げられる。(1) 馬主体期でも述べたように，家畜市場を運営する三本木畜産農協では馬産の衰退により赤字決算の連続であったことから，肉畜への移行を進めていた。そこで，肉畜への移行を行うため昭和32年に三本木地方養豚組合を吸収合併し，生き豚の出荷を始めた[三本木畜産農協 1974 28]。昭和34年から開始された子豚市場は，当初100頭足らずであったものが，10年後には5万頭近い数字となり，東北最大の畜産市場の一つとなった。

豚の出荷頭数・飼養頭数は年々増加傾向にあるものの，市場価格の変動や公害などにより，増減の幅が大きい。一方で飼養戸数は昭和40年代前半から減少に転じていることから，この時期に一戸当たりの飼養頭数が増加している。また，昭和50年代前半と後半に，豚の飼養頭数が大きく減少している。これは，十和田市における公害と昭和54(1979)年以降全国的に起こった畜産物の過剰生

産により豚肉価格が下落したことによる。十和田市では昭和40年代半ばに、家畜、特に豚の多頭飼養による公害が起こっており、昭和48(1973)年には悪臭防止条例を制定している。三本木畜産農協は当時の状況について「活豚の共同出荷は公害等のため飼育農家が減少し、出荷頭数の増加は望めない現況である」〔三本木畜産農業協同組合 1974 30〕と述べていることから、公害の被害が深刻であったことが推察される。具体的な被害の様子を十和田市の広報誌である「広報とわだし」からみてみたい。

「広報とわだし」第258号(昭和46(1971)年8月1日)には、豚の悪臭について次のような相談が寄せられている。

「隣家のぶた小屋が、家の窓から三メートルぐらしか離れていないため、夏ともなると、悪臭、はえ、か、などが群をなして家にはいつてきます。そのためいっさい窓を開けない状態です。どうすればよいやら途方にくらえています」

また、「広報とわだし」第270号(昭和47(1972)年2月1日)には、公害に対するアンケートの結果が記されている。アンケートは無作為に選ばれた十和田市民950人(回収609人、回収率64%)に行われたものである。このアンケートの結果によると、回答者の91%が何らかの公害に悩んだことがあるという。公害の原因と考えられるものは図6のようになっている。結果をみると、豚舎・鶏舎といった畜産に関わるものが上位にあることがわかる。「市街地での養豚をやめてほしい」とする意見もあった。

十和田市の公害の特徴として十和田市は「十和田市の公害の特色として、他の工業都市にくらべ、騒音、振動、大気汚染が比較的少なく、一方農住間の養畜による悪臭公害が多くなっています」〔広報とわだし 第270号 昭和47年2月1日〕と述べている。

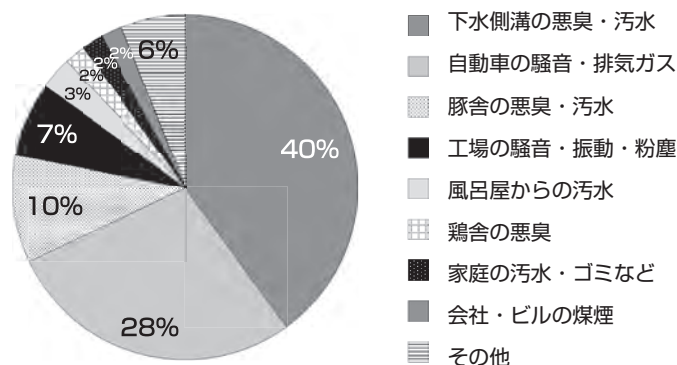


図6 十和田市の公害原因の内訳 「広報とわだし」第270号(昭和47(1972)年2月1日)を参考に筆者作成

畜産公害への対策として、十和田市は施設の改善と畜舎の市街地からの移転等の指導を行った。施設改善には十和田市の社会課公害係と保健所が共同で行い、敷藁交換、床洗浄、尿溜管理、消毒励行といった指導が行われた。昭和48(1973)年には養豚生産団地を建設し、繁殖経営協同利用施設、種豚供給施設、性能調査センター施設等を設置した〔青森県地域研究所 1984 507〕。

豚を飼養するための衛生管理が厳しくなったこと、そして、生産過剰により豚の価格が下がったことで飼養頭数が1～2頭程度の小規模飼養層は飼養をやめ、数十頭、数百頭と大規模飼養層が飼養を継続し、更に頭数を増加させていった。

続いて、肉用牛についてみていく。豚の飼養が昭和30年代後半から大きく増加したのに対し、肉用牛は昭和40年代にゆるやかに増加した。

三本木畜産農協は昭和35年から預託牛制度⁽¹²⁾を行い、昭和37年より肥育肉用牛市場を開設している。十和田市の総合農協も昭和48年から預宅牛制度を始めている。肥育事業が行われた背景として青森県地域研究所は、①有蓄農家創設事業によって子牛生産は伸びてきたが需要が少なく、子牛価格の下落とこれによる飼養頭数が減少してきたこと、②昭和30年以降の耕運機等の普及により役牛が排除されてきたこと、③肥育技術の向上によって肥育牛の年齢が若齢化してきたこと、の3点を挙げている〔青森県地域研究所 1986 499〕。

肉用牛を更に普及させるため、十和田市では昭和44（1969）年に肉用牛繁殖センターの運営を始めた。肉用牛繁殖センターでは繁殖用牝牛が飼養され、生まれた子牛の内牝は繁殖用素牛として、牡は肥育用素牛として、それぞれ市場よりも低価格で農家に払い下げられている。昭和46年における肉用牛繁殖センターの状況は、「農家のかたがたから大変喜ばれ、毎年払い下げの時期には希望者が殺到し、係員がうれしい悲鳴をあげています」（「広報とわだし」第267号 昭和46年12月1日）とあり、活況を呈していた様子がかがえる。昭和45（1970）年に始まった減反政策による稲作主体の経営から稲作・畑作・畜産の複合経営への転換といった理由がある。複合経営の一分野として肉用牛の飼養が選択された。しかし、昭和49（1974）年1月以降は飼料の値上がりと牛肉価格の相場が下落したことを受け、飼養戸数が減少に転じた。

昭和50年代になると、全国的に畜産物の需要停滞によって過剰傾向が顕著になってきたことから、牛肉価格が下落した。以降、肉用牛の飼養は、飼養頭数を増加させ専門化する家と、複合経営の一分野として少数頭飼養を行う家によって行われるようになった。

飼養戸数は減少したものの、肉用牛の飼養頭数は増加した。肉用牛の飼養の隆盛は、三本木畜産農協の運営する市場の開設頻度にも表れている。昭和37年に開設した肥育肉用牛市場は、開設当初年に一度の開設であったものの、年々開設頻度を増やし、昭和59年には毎週火曜日に行われるようになった。肉用牛の肥育が盛んに行われていたことから、「十和田地区の短角肥育牛は青森県のモデル地帯」〔三本木畜産農業協同組合 1984 4〕と呼ばれるようになっていた。この時期には牛肉の銘柄確立の動きもみられ、日本短角種の銘柄として「十和田牛」が、黒毛和種の銘柄として「あおり十和田奥入瀬牛」が生産されるようになった。

一方、戦前から年に1度開設されていた子牛市場は、昭和50年代には年に3回の開設になった。1年に複数回の子牛市場が開設されるようになった背景には、出場頭数の増加だけでなく、放牧場での自然交配から人工授精が普及したことで、出産を調整できるようになったことも関係している。

ここまで、十和田市における畜産の変化を3つの時期に区分してみた。

第二次世界大戦後、軍馬需要の消失により馬産が衰退するなかで昭和30年代前半に乳用牛の飼養が増加し、昭和30年代後半に豚の、昭和40年代に肉用牛の飼養が盛んになったこと、そして、飼

養が盛んとなる家畜が転換する際には、国・県・市の政策、十和田市内の農協などの働きかけ、市場の動向や公害といった要因があったことが明らかになった。

③……………集落の変化

本章では十和田市内の集落を取り上げ、集落で飼育される家畜が前章で提示した3つの時期を経てどのように変化したのかを記述する。

取り上げる集落は晴山集落と七郷集落である（図7）。



図7 晴山集落・七郷集落の位置 5万分の1「十和田」平成18年修正に筆者加筆



図8 晴山集落図 話者提供資料より筆者作成

【晴山集落の場合】

晴山集落は十和田市の中心部から北西に約4km離れた地点に位置する集落である。集落の中心には気比神社・桂水大明神という2つの神社がある（写真6）。桂水大明神は集落の産土とされる神社であり、気比神社は家畜を守護する神が祀られている神社である。集落はこの2つの神社を中心として南北に広がっている（図8）。集落には、民家の他に戦前から商店が1軒、馬喰が1軒、削蹄や蹄鉄を行う家が1軒あった。昭和22（1889）年から昭和48（1973）年までは晴山小学校があり、昭和41（1966）年には農協の倉庫が置かれていたことから、周辺の集落のなかでも大きな集落であったといえる。

総戸数は平成27（2015）年現在で68戸である。本稿において着目する昭和30年代～50年代は、最も多い時期で80戸を数えたものの、徐々に減少し現在の数字に至る。集落の大部分はMとSの2つの姓で構成されており、M姓は2軒の本家（地図中のベツトウ家・M2本家）、S姓は大本家と本家が1軒ずつある。本家とその分家を中心としたシマキと呼ばれる同族団結が形成されている。神社を境にして北側にM姓、南側にS姓の家が多い。M姓の本家2軒とS姓の大本家の計3軒が晴山集落の草分けの家とされており、桂水大明神の祠が建てられた場所に湧き水があったことから晴山の地に住み着いたとする伝承が残っている。M姓の本家の一つはベツトウと呼ばれ、気比神社・桂水大明神両神社の管理を担当している。また、集落には晴山獅子舞（写真7）と呼ばれる神楽があり、平成16年には十和田市指定無形民俗文化財となっている。

晴山集落の人々は他集落の人から「晴山の人は靴履いたまま寝てる」「立ったままご飯食べてる」といったように評され、熱心に仕事をする集落として知られていた。また、「晴山から嫁はもらっても嫁にやるな」とも言われていたようで、勤勉さが評価されつつも働きすぎる印象が強い土地でもあったようである。

平成28（2016）年現在、晴山集落で家畜を飼養するのは稲作・畑作との複合経営のなかで乳用牛を飼養する家が1軒（図8の①）、同様の複合経営のなかで肉用牛の繁殖を行う家が3軒（図8の②・④・⑤）、肉用牛約300頭を飼養する専業の畜産農家が1軒（図8の③）。③*は畜舎）の計5軒であり、養豚を行う家はない。集落の周りは田や畑が広がっているものの、専業農家は10軒に満たず、ほとんど



写真6 桂水大明神と気比神社
平成25年6月15日筆者撮影



写真7 晴山獅子舞のメンバー
話者提供資料

の家が兼業農家や非農家である。しかし、かつては集落のほとんどの家が農家であり、多くの家で馬を始めとした家畜が飼育されていた。晴山集落が現在のような姿になるまでに、どのような変化があったのであろうか。以下、前章で提示した3つの時期区分に従い、飼養する家畜の変遷を記述していく。記述の内容は、晴山集落の歴史に詳しい佐々木秀美氏が作成された晴山集落の歴史年表と、晴山集落に居住する方々への聞き取りに基づいている。⁽¹³⁾

(1) 馬主体期

この時期の晴山集落では畑作と麻、そして、馬産が重要な収入源であった。集落には田があったものの、面積は小さく所有する家は限られており、多くの家が所有する耕作地は畑のみであった。畑では稗や粟などの雑穀栽培や、換金作物として大豆などの栽培が行われていた。一戸当たりの所有する土地は少なく分家を出すことが難しかったことから、次三男以下は結婚後も暫く実家に住み、⁽¹⁴⁾ 経済的に独立できるようになってから自分の家を持ち実家を出た。出稼ぎを行う家もあった。

一戸当たりの耕作地が狭く、冷害などもあったため、農作物による収入は少なかった。そのため、家畜の飼養は収入源として重視され、何らかの家畜を飼養する状態が求められていた。家畜飼養が盛んであったころの気比神社の祭礼の費用は、家畜が出産した家が出していたことから、家畜が高く売れることを期待していたことが推察される。飼養された家畜のなかで最も重要な存在が、馬であった。

晴山集落の多くの家では農耕や繁殖などに用いるため、牝馬や去勢した牡馬を1～2頭飼養し、農耕や繁殖に用いることが難しくなると新しい馬と取り替えた。繁殖用と農耕用の馬を飼養する人もあった。牛や鶏、ヤギや羊を飼養もみられたが、最も多く飼養されていたのは馬であった。新たに家畜を飼養したり、取り替えたりする際には馬喰を通して入手することが普通であった。集落の馬喰は集落の人々の要求に応じて、様々な家畜を扱った。馬喰は集落の人々に家畜を提供する重要な職業であったものの、「馬喰の腹には嘘とクソ詰まってる」（昭和6年生・男性）と表現されることもあり、人を騙す信用ならない職業とも考えられていた。

馬を飼養していたころ、降雪期以外の一日の最初の仕事は馬に与えるための草を刈ることであった。トナと呼ばれる馬の餌は、朝・コビリ（昼前）・昼・夕・就寝前の5回、人間の食事の前に与えていた。馬のエサはトナと呼ばれる。草に米のとぎ汁、米ぬか、豆、燕麦などを混ぜたものをトナ釜で煮て与えていた。米のとぎ汁がない場合には水を入れていた。降雪期には草が取れなくなるため、秋の間に刈っておく。クジョツバ（葛葉）やハギ（萩）も集め、乾燥させておいた。降雪期にエサがなくなった場合には、本家にわけてもらっていたという。農繁期と降雪期以外の日中は馬放し^{うまはな}平や晴山平^{たい はれやまたい}と呼ばれる放牧地に放すため、コビリと昼の食事を与える必要はなかった。放牧地は80町歩ほどであった。放牧地に馬を連れて行くのは小学生や中学生の仕事であり、毎朝学校に行くときに馬を連れていき、夕方馬を迎えに行った。放牧地には「番兵」と呼ばれる馬の監視役がおり、⁽¹⁵⁾ 小学生や集落の老人が行っていた。馬は集落のあちこちにおり、道に飛び出すこともあったため、車やバスが通るようになった際には道の両側に垣を設けていたという。

当時の家は、人の居住する部分と馬を置くマヤが一つ屋根の下につくられていた（写真8）。マヤは日当りの良い南東方向に設けられており、マヤの入口には、馬の健康を祈り絵馬が飾る家もあっ



写真8 マヤのある家
話者提供資料



写真9 絵馬の飾られた家 話者提供資料
*写真中、○で囲った部分が絵馬

た(写真9)。絵馬は子馬が産まれたときなどに買ってきていた。ドマを挟んで人の生活する部分と向かい合う形となっていたため、食事や仕事をしながら馬の様子を見ることができた。厩肥が発酵するため、家の中は冬でも暖かかったという。

人間の食事よりも先に馬に餌を与えていたことや、餌となる草の刈り入れに多くの時間を割いていたこと、そして家の造りから、馬が大切にされていた様子がうかがえる。

飼養している牝馬が発情すると種付けを行った。種馬となる牡馬は集落に一頭飼養されており、S姓・M姓の本家・大本家が一年交代で世話をしていた。生まれた馬は2歳になると、家族が歩いて三本木町や七戸町で行われるセリに連れて行った。セリに出す前に人を乗せる練習をした経験がある人もあった。軍馬需要のあったころは「軍馬御用」となることを目指し、馬産が盛んに行われていた。「馬が高く売れるとお祝いをした」(大正15年生・男性)こともあったようである。軍馬需要のなくなった後も繁殖は行われており、現金収入の少ないなかで重要な収入源であり、重要な生業であったといえる。馬の多寡は家の経済状況を表すものと考えられており、立派な馬を育てることは人物の評価基準の一つであった。

続いて、農耕における馬の役割をみていく。農耕における良い馬とは、「一人で使うことのできる馬」(大正15年生・男性)である。馬耕を行う際には、馬の進行方向を決める「サヘトリ」と馬の後ろで馬鋤を持つ「マンガオシ」の2人で行う。サヘトリをせずとも飼い主の言う通りに動くことのできる馬が、農耕における良い馬とされた。馬を持たない家が農作業で馬を使いたい場合には、馬を持つ家から借り労働で返していた。借りる先は主に本家であった。

牛を飼養する家もあり、馬と共にマヤで飼育されていた。マヤとは別にベコヤ(牛小屋)を建てる家もあった。多く飼育されていたのは、「赤牛」や「短角」と呼ばれる日本短角種であった。牛は雪解けから降雪前まで、八甲田山の麓にある放牧地にいたため、牛が家にいるのは降雪期だけであった。繁殖を目的に牛を飼養していたものの、馬がないときには牛を農耕に用いることもあった。しかし、牛を使う人は少なかったようである。「牛は馬のない人が使う」(昭和7年生・男性)と語られることもあり、牛は馬よりも価値の低い家畜と考えられていたことが推察される。その理由として、牛は馬よりも価格が安いこと、動きが遅いこと、そして、馬糞が牛糞よりも厩肥として優れていたことなどが挙げられた。⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾

当時の集落には、田を含む広い耕作地と多くの家畜を持ち経済的に優位な家・小さな耕作地しかなく家畜を飼養できない零細な家・中間という3つの階層があった。経済的に優位な家は町内会長などの役職につき、集落をまとめる存在であった。特に力のあった家は、S・M姓の本家・大本家4軒である。本家は経済的に優位な立場にあっただけでなく、馬を持たない分家に馬を貸し、馬に与える草がなくなった際には分け与える等、分家を援助する立場にあったという。

(2) 乳用牛増加期

昭和30年の酪農集約地域の指定後、晴山集落でも多くの家が1～2頭のジャージー牛の飼養を始めた(写真10)。ジャージー牛を導入するための支出が困難であったり、出稼ぎなど他の仕事で忙しかったりという理由から飼養を行わなかった家もあった。乳用牛の増加から減少までをみていく。

ジャージー牛を飼養していた頃、3世代で生活していた家の生活を図9に示した。それぞれの世代が仕事を持っていたこと、特に両親が朝早くから夜遅くまで仕事していたことがうかがえる。乳用牛を飼養していた当時学齢期にあった男性が「大人は忙しいから。子供は乳絞る手伝いして、晴山平に(馬を ※ () 内筆者註)連れてってから学校行ったのよ。親は朝起きたら馬のための草を刈って、畑行ってだったから。学校から帰ると馬を迎えに行った」(昭和21年生・男性)と語ったように、忙しい両親を助けるため、子供も重要な働き手であった。

馬が放牧されていたのに対し、ジャージー牛は一日マヤに置いておき、朝・夕に給餌し、搾乳した。

「雪印がきたんだ。工場に勤めてる人も、いたっちゃいたかな」(昭和22年生・男性)と語られたように、搾乳した乳は雪印乳業株式会社の十和田工場に出荷していた。集落の家々で搾乳された乳の集荷は集落に住む人が馬車で行き、工場への出荷は他集落の車を所有する人が行った。『十和田集約酪農地域建設過程』によると、出荷を行う車は毎朝5時半に工場を出発し、7



写真10 ジャージー牛のいる家 話者提供資料

時間	祖父母の行動	父母の行動	子どもの行動
4時	起床	起床 馬に与える草を刈りに行く	
5時	朝食を作る		
6時	学童への弁当作り(夏期) 朝食	帰宅 馬に給餌。搾乳 朝食	起床 搾乳を手伝う 朝食
7時	コビリ(軽食)・昼食を作り、畑に行く夫婦に持たせる		学校へ行く 馬を放牧地へ連れていく
8時	子守 家の周りの草取り	田畑に行き、仕事	
10時	昼食の準備	コビリ 田畑で仕事	
12時	昼食	昼食	
16時	子守 家の周りの草取り	田畑で仕事	学校から帰る 馬を放牧地から連れて来る
17時	夕食の準備	帰宅 馬に給餌。搾乳	搾乳を手伝う
18時	夕食	夕食	夕食
19時	夜の仕事	夜の仕事(木を削ったり、ワラを編んだり等)を行う	
20時			就寝
21時	就寝	就寝	

図9 乳用牛と馬のいる家の生活(3世代家族の場合)
話者の語りに基づき筆者作成

時半～8時ころに晴山で集荷、そして9時に工場に到着していたようである〔青森県経済部畜産課1959 58〕。「絞った牛乳は（桂水大明神の）湧水だとか、井戸に入れて冷やしといたんだ」（昭和20年代生・男性）という。

続いて、乳用牛の飼養が盛んになった理由や飼養の様子を、語りから捉えて行く。「ジャージーは畔草で育てて楽だから、飼育が奨励されたのよ。搾乳の牛。どこの家でも飼ってた。雪印が入って来てね。でも、乳量が少なくて駄目になった」（昭和21年生・男性）
「ジャージーは市が奨励したんだ。畔草で育てられたから。雪印が入って来て、サイロを建てて大きくやり始めたんだけど、搾乳量が少なくてね。段々やめてったよ。…（ジャージー牛は）馬と一緒に置いといたのよ。マヤを区切ってね」（昭和8年生・男性）

ジャージー牛を飼養した理由として、飼養が容易であったこと、畜舎を建てるなど新しい設備を必要としないことが挙げられた。牛馬を飼養した経験があったこと、そして何より収入を増加させたいと考えていたことから、多くの家で飼養された。しかし、飼養が簡単であったものの、乳量が少ないという欠点も挙げられた。

「ジャージーは乳量が少なくて少なくて…。すぐにホルスタインにとっかえた。やっぱり、儲けがね…」（昭和8年生・男性）と語られたように、ジャージー牛からホルスタインの飼養に切り替える人が多かったようである。乳量に応じて収入が決まることから、乳量の多いホルスタインへの切り替えは「儲け」を重視した選択であったことがうかがえる。ホルスタインには稲藁などの草だけでなく、濃厚飼料や大豆、トウモロコシなども与えていた。乳用牛を飼養した家では、同時に馬や豚といった他の家畜を飼養していた家も多く、一つのマヤに乳用牛と馬と肉用牛といった複数の種類の家畜を置いていた家もあった。

乳用牛の導入と同じ頃、豚の飼養や葉タバコの生産も広まった。葉タバコは収入がよく、十和田市からも生産が奨励された⁽¹⁸⁾（写真11）。しかし、「葉タバコは手間がかかるし、できによって収入が左右される」（昭和22年生・男性）という欠点があったため、数年でやめる人が多かったようである。



写真11 葉タバコ生産の様子 話者提供資料

昭和30年代半ばになると、集落では手押しトラクターや田植え機などの農業用機械が普及し、馬の飼養は行われなくなった（写真12）。農業用機械が普及し始めたころは、「鉄の機械は畑に沈んでしまうのではないか」、「機械で耕すと畑が悪くなるのではないか」といった不安から、購入をためらう家や機械購入後も馬を置いておく家が少なかった。しかし、馬で耕すよりもトラクターで耕す方が速く、収穫量も多かったことから、農業



写真12 普及した当初の耕運機 話者提供資料

用機械は急速に普及した。農業用機械は個人で購入することもあったが、複数人で組合をつくり購入することもあった。馬の飼養が行われなくなったことで、放す馬のいなくなった放牧地は開田され、道路に設けられていた垣は飛び出す馬がいなくなったことで取り払われた。馬の飼養が行われなくなったころ、乳価の下落や農作業が忙しくなったことにより乳用牛の飼養も減少していった。農作業が忙しくなったことによる乳用牛の飼養の減少については、次の(3)で詳しくみていく。

(3) 肉用牛・豚主体期

馬・乳用牛の飼養の衰退後、主に飼養される家畜は肉用牛と豚になった。集落内で飼養が盛んであったのは、昭和30年代～50年代末ころであった。肉用牛・豚それぞれの飼養が増加した時期から衰退までをみていく。

豚は昭和30年ころには飼養する家があったが、盛んに行われたのは昭和30年代後半である。集落の多くの家で牝豚を1～2頭飼養し、繁殖を行っていた。豚は三本木畜産農協で行われるセリや馬喰から購入していた。

豚の飼養については「豚は米がいいときにいた。あちこちで飼ってたね。残飯を煮てあげてた。「嫁の小遣い稼ぎ」なんて言われて」（昭和20年代生・女性）、「人間の残飯、夕飯の残りとかと米糠混ぜてやればよかったから、楽だった」（昭和22年生・男性）と語られ、牛馬と異なり草を刈りに行く必要がないという飼養の手軽さが強調された。この時期に豚肉の価格が上がったことを、豚を飼養した理由に挙げる人もあった。

「牛は3年ぐらい、豚は半年ぐらいで大人にして、出荷をトラックを持っている農家をお願いして七戸畜産組合や三本木畜産組合まで運んで、セリに出して転売し、収益を得ていた」（昭和22年生・男性）と語られたように、馬の2年、牛の3年に比べて、子豚の飼養期間は半年程度と短かったため、飼養の手間がかからなかった。豚が多産であったことも、飼養が盛んであった理由といえる。この頃、家畜が出産した人が気比神社の祭礼の費用を出資していたものの、豚の出産は例外であったようである。「豚の神様はいないよ。豚は子供がたくさん産まれるから、腐るほど金ださねばなんねえ」（昭和16年生・男性）と語られたように、豚の多産が強調された。飼養期間が短く、多産であったことから、豚を飼養することで収入を得る頻度が高くなり、豚肉価格は不安定であったものの、多くの家で飼養されていた。

晴山集落内で商店を経営する女性は、「牡が産まれたから去勢するんだって、ウチ（商店）にカミソリ買いにきた人もあった」（昭和23年生・女性）ことを記憶していた。牡豚が生まれた際には飼い主が去勢していたようである。

続いて、肉用牛の使用についてみていく。肉用牛は馬の飼養が盛んであった頃から飼養されていたものの、盛んに飼養されていたのは昭和40年代～昭和50年代である。繁殖を行うために牝牛を飼養することが多く、親となる牛は三本木畜産農協で行われるセリや馬喰から購入していた。預託牛制度を利用するなどして肥育を行う家もあった。

乳用牛から肉用牛へ切り替えた家もあった。「赤牛は乳絞る手間がないから。エサあげてぶんなげておけばいい。乳価も下がってたから儲けも大きくなかったし」（昭和8年生・男性）と語られたように、肉用牛へと切り替えた理由として、乳価が下がったことで大きな儲けを得られなかったこ

と、そして、肉用牛は搾乳をする必要がなくエサを与えておけばよいため手間がかからないことが挙げられた。

肉用牛は、降雪期以外は放牧地に放されていた。放牧地は複数の集落が共同で利用していた。繁殖は放牧地で行われるマキ牛繁殖であり、種牛となる牝牛は放牧地を利用する集落が共同で飼養していた。

牛を飼養した経験のある男性は牛の放牧について次のように語った。

「放牧地には男の人、親父とかが連れてって、冬になる前に連れて来る。牛は山の中の木の葉だとか、草食べ歩きよ。冬（放牧地で牛を）探すときには、3、4人で組んで、寝具持って探しに行くんだ。牛の跡を見て追跡するのよ」（昭和8年生・男性）

放牧地へ牛を連れて行くのは男性の仕事であり、一日がかりで歩いて行っていた。雪解けのころ、集落から放牧地まで牛を連れて行き、雪の降る前に放牧地から連れてきた。

豚が「嫁の小遣い稼ぎ」と称された一方で、牛は「じいちゃん（話者の舅）が世話してた」と語られ、老夫婦世代が中心となって行っていたことが多かったようである。

馬の飼養が行われなくなった昭和40年ころ、肉用馬を飼養した家が一軒あった。三本木畜産農協から購入し、2年ほど飼養した。馬が病気になってしまったため、屠場へ持っていったという。その後、馬を飼うことはなかったという。

上述してきたように盛んに行われていた家畜飼養は、どのように衰退していったのであろうか。家畜飼養が衰退した要因となったのは、開田ブーム、そして、米の生産調整に伴う畑作への移行である。1960年代に起こった開田ブームにより、田が増加し、一戸当たりの耕作地も増加した。「毎年楽しいよね。田がどんどん広くなった。1俵あたりの値段が右肩上がりだ」（昭和22年生・男性）と当時の晴山集落の様子が語られた。耕作地が増加し、農作業が忙しくなったことで、家畜を手放す家もあった。昭和45年からの米の生産調整により、稲作からの転作が行われ畑作が盛んになったことも、家畜飼養をやめるきっかけとなった。稲作は冬期に農閑期があったものの、畑作は年間を通して何かしらの作物を作るためである。(2)でも述べたように、乳用牛の飼養は農作業が忙しくなったことで飼養が減少した。開田を契機に乳用牛の飼養をやめた男性は、「畑が忙しくなったから、ホルスはなくした。（搾乳が）手間だから」（昭和8年生・男性）と、搾乳の手間をやめた理由として挙げた。この時期に乳用牛を飼養する家は大きく減少した。また、昭和50年ころに肉用牛の飼養をやめた男性は、「畑に、仕事も忙しくなったこともあったし、（肉用牛の飼養は）もういいかな、と思って」と語った。この時期は耕作地が増加しただけでなく、兼業農家や被雇用者となる家が増加した。農業・家畜以外の収入の手段が生じたことで家畜飼養を行わなくなる家もあった。

乳用牛や肉用牛の飼養をやめたきっかけとして、農業や他の仕事との関連が挙げられることが多い一方で、豚の飼養をやめた理由は、次のように語られた。

「（豚の飼養をやめた理由は）規制が厳しくなったんだよね。排水の設備がどうか、堆肥も土の上でないとだめだとか。それで、浄化槽をつけたりしなきゃなんなくなっ資金がかかるようになったんで、素人じゃできなくなったのよ。それならって、やめた」（昭和20年代生・女性）

「豚コレラがはやっていっぱい死んだんで、規制ができた。浄化槽つけたりしなきゃなんないとか」（昭和22年生・男性）

豚の飼養をやめたきっかけは、公害の影響により飼育する条件が厳しくなったことであった。集落内での公害は発生しなかったものの、家畜の糞尿による臭いや壤土汚染対策への指導が行われ、飼養を続けるには新たな設備を設ける必要が生じた。設備投資の方が豚から得られる収入よりも大きいと判断した結果、昭和60年ころに豚の飼養は行われなくなった。

この時期は被雇用者世帯や兼業農家が増加し、収入を得る手段が多様化した時期であるといえる。そのため、現金収入の手段として家畜を飼養することが求められる、という状態ではなくなり、家畜を飼養する家は減少し、平成初頭に現在の晴山集落の家畜飼養と同じような状況が形成された。家畜を飼養する家が減少する一方で、家畜の飼養頭数を増やし、専門化した家もあった。現在も飼養を続ける人のなかには「趣味で」飼養しており、「儲けは考えていない」と言う人があった。家畜の飼養は、家や個人の判断で行われている様子が見えてくる。

耕作地の増加や兼業化により収入が増えたことで、集落内の経済格差は是正されていった。収入が増えたことで、家の建て替えが行われた。建て替えによりマヤはなくなり、部屋や物置となった。牛の飼養を継続した家もあったが、ベコヤは家と分けて建てられた。

家畜を飼養する家はあるものの、馬のように放牧や馬耕が行われなくなったため、集落内で家畜の姿を目にする機会は少なくなった。集落のほとんどの家で飼養されていた家畜は、限られた人に限られた場所で飼養されるものとなった。馬に次いで飼養が盛んになった豚や乳用牛・肉用牛は、馬のように多くの役割を持たなかったこと、家畜飼養以外の収入源があったこと、そして、飼養する家が減少していったことなどの理由から、馬のように家の経済力を示す存在とはならなかった。

【七郷集落の場合】

七郷集落は前述の晴山集落のすぐ東側に位置している。軍馬補充部の元町厩舎が置かれていた場所であり、軍馬補充部用地の解放に伴い、入植者を募って昭和21年に誕生した開拓集落である（図10）。入植者は周辺集落の次三男や復員者とその妻子であり、入植時の戸数は57戸であった。入植当初は夫婦のみの世帯がほとんどであった。開拓集落と呼ばれるものの、軍馬補充部の厩舎を住居

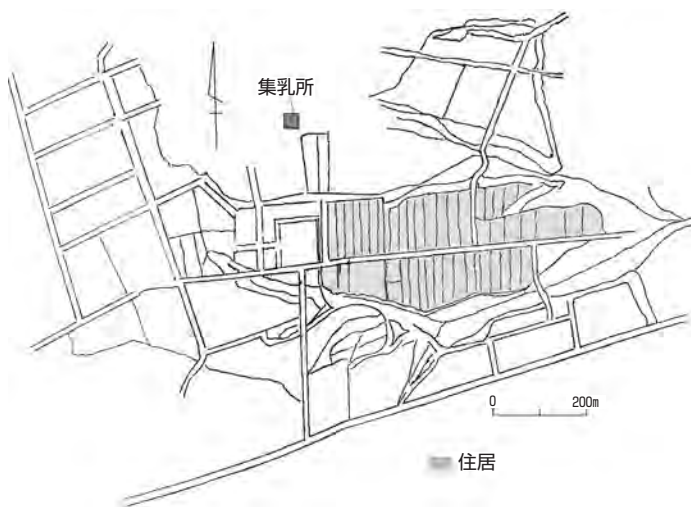


図10 七郷集落図 話者提供より筆者作成



写真13 七郷集落の蒼前神社
2015年6月15日筆者撮影

として利用し、軍馬補充部で耕作していた畑を家ごとに割り当てられたため、当時を知る桜田貞蔵氏（大正15年生）は「恵まれた入植」であったと評した。

現在の七郷集落では家畜を飼養する家はない。しかしかつては多くの家で家畜が飼養されており、集落には家畜の神を祀る蒼前神社が建立されている（写真13）。七郷集落の変化を3つの時期区分のなかでみていく。記述の内容は、開拓35周年記念に発行された『七郷開拓記念誌』と七郷集落を開拓当初から知る桜田貞蔵氏への聞き取り⁽¹⁹⁾に基づいている。

(1) 馬主体期

入植当初、馬を飼養する家は少なく、馬が必要なおときには実家や知り合いから借りてくるなどしていたという。

入植時には一戸あたり2町歩の畑を割り当てられており、内、1町歩が大豆であり、5反歩がデントコーン（黍）、残りの5反歩で稗や粟等を栽培していた。馬鈴薯とデントコーン、大豆を商品作物として栽培し、現金収入を得ていた。田がなく米を自作することができなかつたため、大豆2升と米1俵を交換していた。より多くの収入を得るために家畜飼養を考える家が多く、牛や豚、兎や鶏などの家畜が飼養されていた。入植直後からホルスタインの飼養を行う家もあり、『七郷開拓記念誌』によると、ホルスタインに良質な草を十分に与えるため、ホルスタインを飼養する家が共同で三本木畜産農協の牧草地を購入し、共同作業で刈り取りを行っていたという〔七郷開拓三十五周年記念誌編集委員会 1982 100〕。

昭和25年に行われた国営開墾事業により、現在の十和田市内で44町歩の開田が行われた。七郷集落でも開田が行われ、1戸あたり5反歩の開田が行われた。開田は馬と人力で行ったため、馬のない家では実家や知人から借りてきていた。当時の三本木町の耕作地の平均面積は、1戸あたり1町1反歩～1町3反歩であったものの、開田により七郷集落では1戸あたり2町5反歩の耕作地を所有するようになった。集落内に本家分家関係はないため、田植えは近隣住民で組をつくり、ユイで行っていた。昭和25年より集落の有志による農事研究会を結成し稲作の勉強を行っており、稲作に対する志向が強かった様子がうかがえる。

耕作地が増えたことで、七郷集落では馬を所有する家が増加した。馬は馬喰を介して入手されたり、北海道の馬市で馬を購入されるなどしていた。七郷集落には放牧地がなかったため、馬を使わないときには一日中小屋の中に置いていた。七郷集落の家にはマヤがなかったため、家畜を飼養する際には敷地内にマヤを建てていた。馬の用途は主に農耕と厩肥生産である。集落内に種馬がいなかったため、繁殖はあまり行われていなかったようである。農閑期には馬車による運搬で収入を得ていた人もあったという。

(2) 乳用牛増加期

十和田集約酪農地域に指定されたことで、乳用牛を飼養する家が増加した。良質な草を与えずに済むこと、小型で扱いやすいといったことから、世界銀行の融資を受けて19頭のジャージー牛が導入された。三本木畜産農協の貸借制度を利用した家もあった。

集約酪農地域指定直後はジャージー牛が多く飼養されていたものの、ジャージー牛からホルスタ

インへと切り替える家が多かった。ホルスタインへと切り替えた理由として、「ジャージーは乳量が少なくてですな、加工を行う工場が縮小してしまったんです。それで、乳量が多いホルスタインへと切り替えました」と語られた。「ホルスタインは、近所に飼っていた人があったので、その人から購入しました。馬喰から買った人もいましたよ」と語られ、ホルスタインの入手方法は家によって異なる。

乳を出荷することによって得る収入は「毎月1回農協の銀行に振込みされ」ており、月に一度の定期的な収入を得られるようになった。『七郷開拓記念誌』によると、七郷集落における乳用牛飼養の最盛期は昭和34(1959)年ころであり、飼養頭数は23頭、飼養戸数は18戸であった。飼養規模は1頭飼養が14戸、2頭飼養が3戸、3頭飼養が1戸であった。昭和35年に、乳用牛を飼養する家で「七郷酪農組合」を結成した。この組合で、搾乳した牛乳を冷やしておくための集乳所の建設や乳質検査器具などの共同購入を行った〔七郷開拓三十五周年記念誌編集委員会 1982 101〕。七郷酪農組合では、雪印乳業や農協との連絡や、指導を受けることもあったという。また、サイレージ用カッターの共同購入やサイロ詰作業も共同で行っていた。「(ホルスタインの飼料としていた)牧草、野草共に、年2回刈取り乾燥したものを、畜舎の2階に収納し、それをカッターで切り飼葉として与えていた。それに濃厚飼料や自家産の米糠や大豆などを混ぜ、冬期は更にサイレージやカブを裁断したものを与えていた」という。

乳用牛の飼養は昭和35年を境に減少し、最盛期には32戸あった乳用牛飼養戸数は激減し、昭和50年代末には1軒のみとなった。飼養をやめた理由として、「搾乳した乳は雪印乳業に出荷していたが、数年後、バターや飲用乳(の生産)が過剰になり、乳化が年々おさい(え)られ、経営的に難しくなったため、次第に飼育者が減って来た」といった乳価の下落が挙げられた。また、耕作地の増加により農作業が忙しくなったため、飼養をやめることもあった。男性は、昭和40年代後半に乳用牛の飼養をやめた。「昭和40年ころは忙しかったですよ。会合に農協と…。妻には迷惑をかけました。農作業に牛に家のことと大変だったので、(ホルスタインを)売りました。そのときのことは今でも言われますよ」と、妻の負担を減らしたかったことが理由として語られた。

夫婦と子供からなる核家族世帯がほとんどであったことから、家事・農作業・家畜の世話と、女性の負担は大きかったようである(図11)。七郷酪農組合で建設した集乳所は、昭和48年に唯一飼養を続けていた家に払い下げられた。

乳用牛が普及した昭和30年、上北郡内で最も早く耕運機を購入した。『七号開拓記念誌』には農業用機械を導入した当時について、「今

時間	父の行動	母の行動	子供の行動
4時	起床	起床	
4時半	田をみる		
6時	牛馬に給餌 搾乳	朝食の準備 牛馬に給餌 搾乳	起床 牛馬に給餌 搾乳
7時	朝食	朝食	朝食
7時半	農作業 ※会合等があれば 出席	農作業・家事 馬に給餌	学校へ行く
12時	昼食 農作業 ※会合等があれば 出席	昼食 農作業・家事	
16時		夕食の準備	学校から帰宅
17時	牛馬に給餌 搾乳	牛馬に給餌 搾乳	牛馬に給餌 搾乳
18時	夕食 ※会合等があれば 出席	夕食 家事	夕食
20時		馬に給餌	就寝
21時	就寝	就寝	

図11 馬と乳用牛を飼養していた家の生活
話者の語りに基づき筆者作成

迄馬でさんざん苦い経験をして来ただけに耕耘機はよい物だと感じたものである。飼葉は準備しなくてもよし、エンジンを止めると、だまっている。馬だとその辺の草を食べに歩くのでゆっくり休んでもいられない」[七郷開拓三十五周年記念誌編集委員会 1982 151]という、農耕馬の時代の終わりを物語る回想が記されていた。農業用機械により、農耕馬としての役割は失われ、昭和40年ころには集落内で馬の飼養を行う人はいなくなった。

(3) 肉用牛・豚主体期

豚の飼養は入植当初から行われており、多くの家で1～2頭飼養されていた。豚は残飯を与えるだけで手間がかからなかったためである。一方、肉用牛の飼養はほとんど行われていなかった。昭和47年の統計によると、豚の飼養の平均が1戸あたり1頭であるのに対し、役肉用牛は13戸で1頭となっている[七郷開拓三十五周年記念誌編集委員会 1982 19]。昭和47年当時の七郷集落の戸数が54戸であったことから、集落内の肉用牛は4頭ほどであった。肉用牛の飼養が盛んにならなかった理由として、稲作が盛んであったことや、兼業農家の増加などが挙げられる。

昭和30年代半ばから昭和40年代前半は開田ブームにより耕作地が増加し、米価も上昇していた。七郷集落には稲の種苗センターが置かれたことで、米だけでなく米の種苗栽培を行う家も多かったため、稲作による収入が大きかった。「米の種苗栽培は一般の稲作よりも手間がかか」るが、「値段が一般のより35%程高い」ため、「儲けが大きかった」という。米の生産調整の後、「七郷では種場としての県指定のバックもあり」、「そ（生産調整）の後共、稲作収入の確保を図ることができた」[七郷開拓三十五周年記念誌編集委員会 1982 19]ようである。また、「水田が少なかったので、息子は市内に働きに出しました。2町歩かそこらではやっていけない」と語られたように、跡継ぎにあたる男性を働きに出し、兼業農家となった家も多かったようであり、農業以外の収入を得ることができるようになっていた。入植当初は全戸が専業農家であったものが、昭和47年の統計によると、54戸のうち専業農家が21戸、1種兼業が28戸、2種兼業が5戸と、半数以上の農家が兼業農家となっていた[七郷開拓三十五周年記念誌編集委員会 1982 19]。壮年の男性が働きに出、女性が家事や農作業を一人で行わなければならなくなったことで、家畜の飼養が困難になり、飼養をやめる家も少なくなかった。

公害の影響で衛生管理が厳しくなったことや豚肉価格の下落を受け、豚の飼養は大きく減少した。昭和60年から平成初頭にかけて乳用牛・肉用牛の飼養も行われなくなったことで家畜がいなくなり、現在の七郷集落と同様の状況になった。

ここまで、晴山集落と七郷集落という性格の異なる集落における家畜飼養の変遷をみてきた。飼養される家畜の主体が馬から肉用牛・豚へと転換するに伴い、集落で飼養する家畜は減少していった。そして、政策や家庭の事情に応じて家畜飼養の選択が行われている様子が明らかになった。

どちらの集落とも、現金収入を得ることが難しかったころ、家畜飼養は重要な収入源として考えられ、積極的に家畜が導入された。しかし、耕作地の増加や兼業化などにより収入を得る手段が多様化したことで、家畜飼養は衰退していった。

飼養する家畜の変遷は共通していたものの、乳用牛増加期に七郷集落では組合を結成し収入所を

建てていたのに対し、晴山集落では収入を仕事とする人が現れたこと、そして晴山集落では肉用牛の飼養が行われたものの、七郷集落ではほとんど普及しなかった、といった集落による相違点もみられた。

④……………馬産地十和田における昭和30年代～50年代の変化

十和田市における家畜飼養は、馬主体の飼養から昭和30年代に起こった乳用牛の増加を経て、昭和40年以降は肉用牛や豚が主体となった。3つの時期それぞれの要点をまとめる。

(1) 馬主体期では馬の飼養が盛んに行われ、農耕・運搬・繁殖などに用いられていた。牛や豚など、馬以外の家畜も飼養されていたが、馬は他の家畜よりも重要な家畜として位置づけられていた。現金収入の少ないなかで馬を売ることによって得る収入は大きかったことから、馬産は重要な生業であり、馬の多寡は家の経済状況を表していたため、家畜を多く飼養し耕作地の多い家とそれ以外の家という集落内の経済格差が明確であった。

この時期、家畜の飼養は現金収入を得るための数少ない重要な手段であったため、家畜を飼養したいと考える家が多く、家畜、特に馬を飼養している状態が普通であった。農耕や繁殖に使えなくなったため家畜を「取り替える」・セリに出す年齢となった・家の経済状況の悪化により飼養を続けていくことが難しくなった、といった理由がない限り、家畜の飼養が行われていた。

(2) 乳用牛増加期は集約酪農地域の指定をきっかけに、多くの家で乳用牛が飼養されるようになり、生乳を出荷することで月に一度の定期的な収入が入るようになった。家畜を飼養したいと考える家が多かった時期に十和田市が集約酪農地域に指定されたことで、乳用牛は積極的に飼養された。ほとんどの家にマヤがあったため新しく牛舎を建てる必要がなかったこと、これまでに馬や牛を飼養した経験があったことも、乳用牛頭数・飼養戸数が飛躍的に伸びた理由である。当初普及したジャージー牛は乳量が少なかったため、ホルスタインの飼養に切り替えた家が多かったことから、乳用牛の導入は収益性を意識して行われていたことがうかがえる。

(3) 肉用牛・豚主体期では、馬・乳用牛が減少し、飼養される家畜の主体が肉用牛・豚となった。農業用機械の普及により農耕馬としての需要が減少したことで馬を飼養する家が減少し、馬産も衰退した。また、乳価の値下がりや搾乳の手間を省くため、乳用牛の飼養をやめる家も多くあり、飼養を続ける家では収入を上げるために飼養頭数を増加させ、専門化していった。馬や乳用牛の飼養が衰退した一方で、主に飼養される家畜は肉用牛・豚となった。食肉需要の増加による豚肉・牛肉価格の上昇、三本木畜産農協の行った預託牛制度、国や県、農協による繁殖牛の貸与制度などにより飼養頭数・飼養戸数が増加した。この時期の家畜飼養は、家畜頭数は増加したものの、飼養戸数は減少しており、(2) 乳用牛増加期までのように多くの家で少数頭飼養されるという状況から変化が起こった。開田ブームによる耕作地の増加、兼業農家の増加により農作業が忙しくなったこと、そして、家畜飼養以外に収入の手段が生じたことで、家畜飼養をやめる家が出てきたためである。晴山集落において豚の飼養が「嫁の小遣い稼ぎ」と称されたように、家畜飼養による収入の割合が小さくなった家も少なくなかった。また、老夫婦が牛の世話、嫁が豚の世話というように、家畜の世話を分担して行っていた。一方、七郷集落は核家族世帯が主であったことや、稲作による収入が

大きかったことなどから、肉用牛の飼養はあまり行われなかった。

耕作地の増加や兼業化により各家の収入が増加したことで、集落内の経済格差が縮小した。また、家の建て替えも行われるようになり、マヤは部屋や車庫などに作り替えられた。家畜飼養を続ける家では、新たに畜舎を建てて家畜を飼養するようになった。家畜を飼養する家が減少したことで、家畜は特定の場所で特定の人に飼養されるようになった。公害をきっかけに家畜を飼養するための設備を整える必要が生じたこと、食肉の生産過剰による価格低下、飼料高を受け、家畜飼養を続ける家では、専業化し大型経営を展開する家と、稲作・畑作などの複合経営のなかで少数頭飼養を行う家とにわかれた。複合経営を行う人のなかには、「儲けは考えていない」と利益を度外視した人もあった。耕作地の増加、職業の多様化により家の経済状況を家畜のみで計ることが難しくなったことから、家畜が家の経済状況を表すという認識は失われていった。

十和田市は上述したような3つの時期を経て、馬産地から肉用牛・豚の生産が盛んな地域となった。②において明らかにしたような政策や市場価格の変化といった家畜を飼養する家を取りまく環境による要因と、③において記述したような家庭の経済状況や家族構成、他の仕事との兼ね合いのなかで飼養する家畜、そして家畜飼養の可否の選択が行われてきた。

3つの時期を通じて十和田市では畜産が重要な生業であったことには変わらないものの、かつては多くの家で飼養されていた家畜は、特定の人により特定の場所で飼養されるようになった。このことから、家畜は必要不可欠な存在から、家ごと、そして個人の選択によって飼養される存在となった。では、飼養する家畜を選択する際、どのような点が重視されたのであろうか。2集落での事例において記述したように、家畜を飼養する理由・やめる理由として多く挙げられたのは、家畜を飼養する上での困難、そして収入であった。現地の人々の言葉を借りれば、前者は「手間」、後者は「儲け」の問題としてまとめることができる。そこで、家畜を選択する際に重視するものを「手間」と「儲け」から検討したい。

(1)の時期において家畜飼養で重視されたものは「手間」よりも「儲け」であった。主に飼養されていた馬は、飼料となる草刈りなどのために多くの「手間」がかかっていたものの、農耕や繁殖など多様な役割を持ち儲けが大きかった。そのため、馬よりも手間がかからないものの、儲けの小さい牛は「牛は馬のない人が使う」と語られたように、価値の低い家畜と考えられ、飼養する家も少なかった。

(2)の時期は儲けと手間が拮抗する時期にあったと考えられる。この時期は乳用牛を飼養し、乳を出荷することで月に一度の定期的な収入を得ることができるようになった。当初普及したジャージー牛は飼養が簡単で手間がかからなかったことから、多くの家で飼養された。しかし、「ジャージーは乳量が少なくて少なくて…。すぐにホルスタインにとっかえた。やっぱり、儲けがね…」(昭和8年生・男性)と語られたように、ジャージー牛の儲けが小さかったことから、より手間がかかるようになるものの儲けの大きいホルスタインへと切り替えたり、乳用牛の飼養頭数を増加させたりした。一方、それまで重要な家畜として飼養されてきた馬は、手間のかからない機械の導入により飼養が行われなくなった。

(3)の時期では、手間をかけずに儲けを得ることを重視する傾向が強くなる。豚は価格の変動が大きく、それによって儲けが変化するものの、飼養期間が短く、エサも残飯で済むなど飼養に手間

がかからなかったため、多くの家で飼養された。しかし、公害の影響により、豚の飼養を続けるためには設備が必要となり、少数頭飼養では設備投資が儲けを上回るようになった。そのため、「素人じゃできなくな」(昭和20年代生・女性)り、飼養が行われなくなった。(2)の時期に普及した乳用牛は、搾乳の手間を省くため、エサを与えておけばよい肉用牛へと切り替えられるなどしたことで、飼養が減少した。また、農作業や他の仕事が忙しくなったことで、家畜飼養自体が手間となり、家畜飼養は衰退していった。

このように、飼養する家畜を選択する際には家畜の持つ「手間」と「儲け」を重視して選択していた。耕作地の増加や被雇用者となるなど、他の収入源との関係により、手間と儲けの関係は異なる。飼養者が家畜以外による現金収入を持つことで、手間のかからない家畜を選択する傾向が強くなっていることが指摘できる。

おわりに

本稿では十和田市を事例とし、昭和30年代～50年代における家畜飼養の変化を明らかにしてきた。

本稿において明らかになったことは、以下の4点である。

1つめは、飼養する家畜の変遷である。馬産が主要な生業であったことから馬の飼養が中心であったが、昭和30年に集約酪農地域に指定されたことで、乳用牛の飼養が普及した。馬は昭和30年代半ばに、乳用牛は昭和40年代に衰退し、その後は肉用牛・豚といった肉畜の飼養が盛んな地域へと変化したことが明らかになった。

2つめは、飼養する家畜が変化する要因である。②において明らかにしたような政策や市場価格の変化といった家畜を飼養する家を取りまく環境による要因と、③において記述したような家庭の経済状況や他の仕事との兼ね合いのなかで、飼養する家畜、そして家畜飼養の可否の選択が行われてきた。

3つめは家畜を飼養することに対する位置づけの変化である。馬産地から肉豚・肉用牛の生産が盛んな地域となり、畜産が盛んな地域ではあることに変わりはない。しかし、馬が主に飼養されていたところは集落の多くの家で家畜が飼養されていたものの、肉用牛・豚が主体となった後は、家畜頭数が増加した一方で家畜飼養戸数は減少し、特定の場所で特定の人が飼養する存在となった。耕作地の増加や職業選択の多様化により、家畜は飼養すべきものから個人の選択によって飼養されるものとなったことが明らかになった。

4つめは飼養する家畜を選択する際に重視する点である。飼養する家畜を選択する際に重視する点は、家畜にかける「手間」と家畜から得られる「儲け」であった。飼養者の家族構成や家畜以外の収入源の有無・多寡などにより、重視するものが変化することが指摘できる。

最後に、本稿において十分に検討することのできなかった課題を3つ挙げる。

1つめは、他の地域との比較である。本稿では家畜の売買を重要な生業としてきた地域の生活変化を、十和田市を事例として明らかにしてきた。しかし、家畜の生産地帯は十和田市だけでなく日本各地に存在する。そのため、他の地域の家畜飼養についても明らかにする必要がある。他の地域

との共通点・相違点を比較検討することで、家畜の生産地帯の変化の特徴を捉えることができると考える。

2つめは、家畜飼養を継続している人々への着目である。本稿では家畜飼養の変遷に重点を置いていたため、家畜飼養を継続する人々についての記述が不十分であった。周囲の人々が家畜飼養を止めて行く中で、なぜ、飼養を続けていくことにしたのか。飼養を継続する人々についても着目することで、家畜飼養に対する現地の人々の心意の解明につながるのではないかと考える。

3つめは、食文化との関連を明らかにすることである。本稿は、食肉の生産地帯の人々がどのように飼養する家畜を変化させてきたのかに着目してきた。当地で飼養された家畜は、最終的には食肉や牛乳、チーズなどの食品となり、食卓に上ることとなる。そのため、家畜の飼養は同時代の食文化と不可分の関係にあるといえる。当時の食文化との関連を捉えることで、家畜飼養の変遷を現地の文脈に留まらない多角的な視点で捉えることが可能となると考える。

註

(1)——家畜は狭義には農業生産に役立つもののみを指し、広義には愛玩動物（ペット）も含む〔秋篠宮文仁・林良博 2009 2〕。本稿では、「人間が生殖を管理し、人間社会の中で役畜・用畜として用いられる動物」を指し、収入をもたらさない動物（ペットなど）は含まないこととする。

(2)——岩手県の北上山地で牛の生産を行ってきた人々の飼養形態の変化について述べた佐川徹の論考は、家畜飼養が重要な生業となっていた地域における高度経済成長期の生活変化がまとめられている〔佐川 2009〕。

(3)——応徳3(1086)年に編まれた『後拾遺和歌集』に陸奥（現在の青森県・岩手県・宮城県・福島全域と秋田県の一部）の馬の歌が詠まれていることから、平安時代には馬の産地として知られていたことがうかがえる。

(4)——馬の放牧地を指す。

(5)——青森県上北郡おいらせ町の氣比神社の絵馬市で販売される絵馬である。自身の飼養する家畜に似た絵馬を購入し、マヤに飾ることで家畜の健康を祈願した。

(6)——十和田市による家畜飼養戸数の統計は平成10年以降のものしか存在しないため、『青森県の姿—県勢要覧』と『世界農林業センサス』を用いる。また、飼養頭数については、『馬の町三本木と馬車』〔十和田市 2002〕の統計を用いる。

(7)——家畜市場は2市4町1村（十和田市・三沢市・六戸町・十和田湖町・下田町・百石町・倉石村）を管轄する三本木畜産農業協同組合（以下、三本木畜産農協と記す）が運営しているものである。グラフの市場出場頭数は三本木畜産農協が管轄する全ての市町村の合計となっ

ている。図は『馬の町三本木と馬車』〔十和田市 2002〕の統計に基づいて作成した。

(8)——申請当時は合併以前であったため、十和田市の前身である三本木町・大深内村・四和村・藤坂村として申請された。

(9)——『十和田集約労働地域建設過程』〔青森県経済部畜産課 1959〕の統計を参照に、筆者算出。

(10)——搾乳した乳をなるべく早く冷却するために用いる。

(11)——三本木畜産農協が肉畜の飼養普及や流通に大きな影響力をもっていたことは、新山陽子の研究〔新山 1980〕に詳しい。

(12)——農協が肥育素牛を購入し、農家に貸し付けて生産を行わせる制度である。昭和30年頃、畜産物の生産と消費の急激な増加を背景に、食肉流通市場の政策的整備が進み、肥育農家の生産家庭を掌握する必要性が生じたことにより、全国的に始まった制度である。三本木畜産農協の肥育事業は、青森県内で最も早く行われた。

(13)——平成25(2013)～27(2015)年にかけて複数回聞き取り調査を行った。

(14)——男性が出稼ぎに行き、残った家族が農作業を行っていた。出稼ぎ先としては北海道のニシン漁や近郊都市への土木工事などがあった。遠方への出稼ぎには一年を通して行き、盆と正月のみ帰ってきていた。第二次世界大戦終戦前には軍馬補充部で勤務をしていた人もあった。

(15)——昭和20年ころまでは小学生が番兵をしていたことが多かったようである。番兵のために学校に休みを

もらったことを記憶している男性（昭和7年生）もあった。その後は、老人などの大人が行っていたという。

(16)——牛の価格は昭和初期に一般の馬よりも高くなっているものの、軍馬価格には届くことはなかった。

(17)——東北は耕期が短いため、動きの速い馬が重宝された。馬糞は発酵性がよかったため、牛の糞よりも東北地方の厩肥に適していた〔森 1987 175〕

(18)——昭和30年7月15日の広報とわだに「葉たばこ

の耕作をはじめたい方に」という見出しで葉たばこの生産を奨励する記事があり、十和田市全体に普及させようとしていた様子がうかがえる。

(19)——平成27～28（2016）年にかけて複数回にわたり聞き取りを行った。引用の註記がない限り、記述した語りはすべて桜田貞蔵氏への聞き取りから得たものである。

参考文献

- 青森県経済部畜産課 1959『十和田集約酪農地域建設過程』青森県
秋篠宮文仁・林良博 2009「家畜という文化」秋篠宮・林良博編『ヒトと動物の関係学 第2巻 家畜の文化』岩波書店
兼平賢治 2015『馬と人の江戸時代』吉川弘文館
軍馬補充部三本木支部創立百周年記念実行委員会 1987『軍馬のころ 軍馬補充部三本木支部創立百周年記念誌』
佐川 徹 2009「『いい肉』とはなにか 短角牛をめぐる生産者と消費者の葛藤」菅 豊編『人と動物の日本史3 現代社会と動物』吉川弘文館
三本木畜産農業協同組合 1974『三本木畜産農業協同組合小史』
三本木畜産農業協同組合 1984『百年のあゆみ 創立百周年および事務所等新築移転落成記念誌』
七郷開拓三十五周年記念誌編集委員編 1982『七郷開拓記念誌』七郷開拓三十五周年記念誌編集委員
杉山道雄 1984「水田単作地帯における水田酪農展開に関する経済的研究—青森県十和田市及び田子町における事例—」『岐阜大農研報』49
十和田市 2002『馬の町三本木と馬車』十和田馬事歴史研究会
十和田市史編集委員会編 1976『十和田市史 下巻』十和田市
十和田市農林部農林畜産課 2014『十和田市の農業』
十和田市農林部農林畜産課 2015『十和田市の畜産』
新山陽子 1980「肥育牛預託制度の成立要因と存在形態」『農林業問題研究』16（2）
農林省畜産局 1951『東北地方の短角系種』
野本寛一 2015『牛馬民俗誌 野本寛一著作集Ⅳ』岩田書院
森 嘉兵衛 1987『森嘉兵衛著作集第一巻 奥羽社会経済誌の研究／平泉文化論』法政大学出版局
安室 知 2012『日本民俗生業論』慶友社

（筑波大学人文社会科学部研究科歴史・人類学専攻、国立歴史民俗博物館リサーチアシスタント）

（2017年1月20日受付、2017年6月5日審査終了）

Transformation of Towada as a Horse-breeding Region from the Late 1950s to the Early 1980s : Focused on the Changes of Livestock Breeding

KAMIGATA Chika

Many households used to raise domestic animals for farming, transport, and fertilizer production, but the number plunged due to the mechanization of agriculture and the spread of automobiles. What changes this sharp drop in livestock numbers brought to ranching regions? This paper focuses on Towada City in Aomori Prefecture as a case study to examine the changes in livestock breeding in ranching villages. Towada is located in a long-established horse breeding region where the livestock industry is still dominant. In this region with a cold climate that makes farming unprofitable, livestock, especially horses, used to be an important source of income for farmers. Horse breeding was a major livelihood, and horses were invaluable. Nowadays, however, only a few farmers breed horses. Instead, beef cattle and pigs have become popular as livestock in the city. How horse breeding was replaced by cattle and pig breeding? What factors influenced the choice of livestock to breed? In order to answer these two questions, this paper analyzes the actual situation of Towada from the late 1950s to the early 1980s, when the city went through a significant change in livestock ranching. Chapter 2 examines statistics and municipal bulletins to draw a whole picture of transformation of livelihood breeding in Towada. It is aimed to identify exactly when horse breeding was replaced by beef cattle and pig breeding and why this shift occurred. Chapter 3 focuses on two communities with different characteristics, examining the changes in their livestock breeding. It is aimed to reveal how the livestock that used to be raised around the communities were monopolized by certain people in certain areas. Chapter 4 presents that laboriousness (how laborious it would be to raise the animal) and profitability (how profitable the animal would be) were important factors that influenced the choice of livestock to breed. Farmers developed a preference to less laborious and more profitable animals while they were raising their incomes from other than livestock by operating side businesses or expanding agricultural land.

Key words: Horse-breeding region, livestock, pollution, livestock market, laboriousness and profitability